新品種・新技術の確立
支援　取組概要
（R2～R3）

『いちご新品種「よつぼし」の高品質生産技術の確立』

＝三重県＝

【全体概要】 いちごの生産性向上を図り、付加価値の高いいちご生産技術を確立するため、「よつぼし」の種子繁殖ではない、ランナー増殖による大苗育苗により、大玉果実生産技術の確立に取り組みました。

また「よつぼし」は、業務用需要が高いとの声があることから、今後の販売展開として、使用農薬に制限がある海外などの地域にも対応できる病害虫対策として、気門封鎖系の農薬や天敵等資材を活用した害虫対策や、酸性電解水（電解次亜塩酸水）を活用した病害対策を講じ、化学農薬の低減に向けた対策に取り組みました。

新品種・新技術等の概要

・ ランナー増殖による大苗生産技術

ランナー採苗によるポット育苗により、苗の充実化と果実の大玉化を図る。

・ 化学農薬低減技術

使用農薬に制限がある海外にも対応でき、生産技術が付加価値となるよう、気門封鎖系の農薬や天敵等資材を活用した害虫対策、酸性電解水（電解次亜塩酸水）を活用した病害対策を講じ、化学農薬の低減を図ります。

ランナー受け作業（左）
ハダニ類天敵バンカーシートによるハダニ類防除（右）

主な取組内容

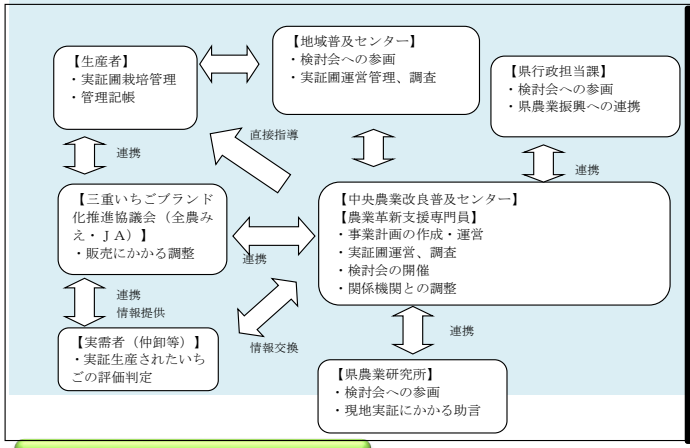
・ランナー増殖による大苗育苗

いちご生産者の生産性向上を図りつつ、消費者へ付加価値のあるいちご生産技術を確立するため、「よつぼし」の種子繁殖ではない、ランナー増殖による大苗で大果生産技術の確立に取り組みました

・化学農薬低減技術

気門封鎖剤や高濃度炭酸ガス施用および天敵導入によるハダニ類防除と、酸性電解水（電解次亜塩酸水）を活用した、炭疽病やうどんこ病、灰色カビ病の防除対策に取り組みました。

実施体制図



中央農業改良普及センターが中心となり、生産者、地域普及センター、試験研究機関、県行政担当課、全農みえおよび実需者との連携を図りながら、各機関の調整や事業の進行管理を行います。

産地指導機関としては、対象地域普及センターが担います。

課題と今後の対応

大苗での生産を行った結果、12月中旬から収穫を開始し、3月末までの果実重は株あたり440g前後（対照の約1．5倍）、一果あたり平均約20gの果実重となりました。引き続きランナー採苗の有利性の検証と、2次育苗セル苗との検討をおこまいます。

害虫対策は、育苗期はハダニ類に対して天敵と気門封鎖剤を活用した防除を行い、定植前に高濃度炭酸ガス施用、本圃においては天敵と気門封鎖剤を導入した防除を実施し、概ねハダニ類を抑えることが出来ました。

病害については、育苗期の炭疽病対策として、酸性電解水を1回／週散布してきましたが、8月以降被害苗が一部で確認され、拡がりはありませんでした。本圃では、うどんこ病、灰色カビ病を主な対象として、酸性電解水を1回／2週の間隔で実施しましたが、うどんこ病の発生は確認されませんでしたが、灰色カビ病は、12月以降一部で発生が確認され、防除実施タイミングの再検討と効果の検証をおこないます。